（会　告）

社団法人日本超音波医学会

第5回特別学会賞受賞者

2003 JSUM Prize Winner

竹原　靖明（1930-）

竹原靖明氏は，1960年代半ばから医用超音波の研究に従事され，特にその臨床応用に多大の功績を挙げられた．また氏は本学会の運営に長年携わり，学会の健全なる発展と社会的貢献を目指し尽力されるとともに，後進の育成にきわめて熱心に取り組まれた．

竹原氏は1930年4月28日の出生であり，1957年徳島大学医学部を卒業後国立東京第一病院外科を経て，1960年関東中央病院外科の医員となられた．1981年に画像診断部長，1989年には副院長に就任され，1996年には定年により同病院を退職されている．この間，本学会はもとより 様々な学会の会長・理事をつとめられ，超音波医学を中心とした学会活動を精力的に行われてきた．

氏の超音波医学における業績はきわめて多大かつ多彩なものがあるが，大別すると1）診断装置の分解能向上に関する研究　2）高分解能リニア電子走査型装置の開発及び臨床応用　3）組織の音響特性の研究　4）乳腺疾患の超音波診断の確立　5）超音波による集団検診の整備・促進となろう．診断装置の分解能向上については，70年代の初期にSTC機構やSkin-trigger法による検討をされた．高分解能リニア電子走査型装置の開発に多大な貢献をされ，特にその臨床応用について指導的な役割を果たされたことはあまりにも有名な事実である．リニア電子走査型装置の画質向上にも

取り組まれ，断層像の読影を妨げる因子を検討し，その成果は診断能の向上に直接的に結びついたものとなっている．また組織の音響特性に関する研究としては，皮膚の音響インピーダンスの測定，肝臓を中心とした音速の計測などを，基礎的・臨床的にきわめて精力的に行い，多くの意義あるデーターを報告されている．竹原氏の臨床的な業績として特記すべきは，乳腺超音波所見の詳細な検討から乳癌の診断基準を提唱されたことであり，特に乳癌の早期診断法として超音波検査を世に知らしめた功績は多大なものがある．この臨床的研究は必然的に超音波検査による集団検査へと進んでいったのであり，乳癌集検装置の試作と臨床応用を立ち上げ，さらに腹部領域の集団検診のシステム作りへとその努力は今日まで続いているのである．

竹原氏の功績の中でも特記すべきものの一つに，本学会の運営に関するものがある．1972年に役員として参画して以来，1976年から10期20年の長きに渡り本学会理事として活躍された．この間1978年には第33回研究発表会会長を務められ，1980年からと，1988年からの2年間に通算して4年間を学会副会長として，1990年からの2年間は本学会会長として学会を指導された．翻ってこの期間を顧みるに，まさに日本超音波医学会は激動の時期であったといえよう．超音波医学の急速な進歩や普及により本学会は飛躍的に大きくなり，また対社会的な対応も必要となったのである．氏は，本学会の改革に尽力され，その成果は，役員定年制の導入，地方会の設立と学術集会の年一回開催，さらに超音波検査士認定制度の確立などに結実している．今日の地方会の隆盛と検査士制度の充実をみると，改めて氏の功績の大きさに感服する次第である．また本学会の社会的基盤を確固とすることも重要な課題であり，法人化の取得と日本医学会分科会加盟が提案され実現に向けて学会が取り組むこととなった．氏は特に後者の責任者としてきめ細かい体制をつくり，その結果1987年に第85番目の分科会として認められたのである．

竹原氏は上記のごとく，超音波医学や本学会のため多大な功績を挙げられたが，さらに加えて氏の超音波医学の教育者としての側面も忘れてはならない．竹原氏が編集された超音波医学に関する教科書は20冊にも及んでいるが，いずれもが臨床的に評価が高いものであり，超音波医学の普及に果たした役割はあまりに大きいといえる．氏の直接的教えを受けた医師，臨床検査技師，看護師，臨床放射線技師は全国津々浦々に存在し，今日の日常臨床超音波検査を担っているのである．同様に多くの技術者達も竹原氏を師と慕っており，師を囲み様々な研究会が今でも地道に続けられているときいている．これは竹原氏のまさに人徳なのであり，私心のないその人柄と超音波医学にかけた情熱を，教えを受けた方々が感じ取るからであろう．

（杏林大学　跡見　裕）